

日本の近代書物の誕生 3—製本技術の移入と変遷

大阪芸術大学 文芸学科 教授 福江泰太

日本において和本から洋装本へと移行する際、その先鞭をつけたのは「辞書」である。

文化5年(1808年)のフェートン号事件以降、幕府は通詞に英語、ロシア語の習得を命じる。語学習得には「辞書」の編纂が不可欠であり、最初の本格的な辞書は、堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』である。同書は「英語はオランダからきた鉛活字、訳語は木版による。我が国最初の洋装活版本」で(早川勇編『日本英語辞書年表』1998年)、初版の原装は革装であったようだ(惣郷正明『洋学の系譜』1984年)。現存が確認されている初版は15冊(これらを含め消息の判明した本は25冊)だけで(『英和对訳袖珍辞書』の遍歴)1999年、以下『遍歴』と略記)、書影を見ても、後年、改装されたようで、原装の姿も、その背にどのようにタイトルがはいっていたのかも、残念ながら分からない。初版の時期も諸説あるが、早川は文久2年12月(陽暦では1863年1~2月)としている(辞書の扉には「文久二年江戸開板」「PRINTED AT YEDO, 1862」とある)。本文用紙は、鳥の子紙または輸入洋紙で、両面印刷。1折りが24頁であることを高野彰が解明している(『遍歴』中の引用による)。1折り24頁にする方法は、6面付け(裏表12頁分)した用紙を2枚重ね、まずZ型に折り、それを2つ折りにすることで完成する。この特殊な面付けを誰が思いついたのか? 高野は蕃書調所の活字御用掛と彼らを陰ながら援助したポルトガル人ダ・ローザだと推定している(同前)。しかしながら同書では製本様式には言及していない。折丁であるからには膝(かが)りだと思われる。書影には膝り糸の支持体である横糸が通っている穴がはっきりと4か所認められる(そのほか天地にそれぞれ1か所ずつ穴が認められるのは、膝る際、次の折丁に針を進め、同時に折丁どうしを結束するためのものである)。ただしこれらの支持体の横糸が表紙にどのような接着されているのかは書影からは判断できない。

私は、以前より、洋装本の第1の条件は、背を正面に向け書架に垂直に立つこと、だと考えてきた。

『英和对訳袖珍辞書』が、堅牢な表紙の革装で、背に表題が入っていれば、明治以前に成立した「近代的書物」の嚆矢だといえよう。表紙の芯材は、板紙ではなく、厚めの紙を貼り合わせ圧をかけたものであろう(板紙は明治10年頃佐久間貞一により抄紙に成功している)。私が何よりも『英和对訳袖珍辞書』初版について心を動かされるのは、洋装本への試みが、すでに明治以前から始まっていたという事実だ。

万延元年には遣米使節団が、アメリカから220冊以上の洋書を購入し、蕃書調所の蔵書とするなど(惣郷前掲書)、これまでになく洋書が日本に入ってきた。洋書を知る知識層は確実に増加し、このことが明治の洋装本化に拍車をかけたと推察される。

以前、私は、いわゆる「ボール表紙本」を和洋折衷的な簡易洋装本だと指摘したが、これは背にタイトルが入っていない、という点を除けば、確かに「洋装本」

といえる。というのは、1800年代後半の英語のリーダーをはじめとした、いわゆる「テキストブック」の外観をまねたのではないかという疑問が生じたからだ。「ボール表紙本」という呼称は、どこか日本固有の書物の姿のように感じさせるが、むしろ、欧米の安上りなテキスト本を見て、「これだったら制作できるのではないか」と和本職人も考えたに相違ない。ただし、欧米のテキストブックの背には表題を印刷した紙が貼り付けてあるという違いがある。

明治の製本技術について、2つの視点から考えようとしている。ひとつは、とじつけ製本術とくるみ製本術の関係。もうひとつは、綴じから膝(かが)りへの移行。

西洋古典籍の革装本の大半は、本文とは別に表紙を作り、本文と表紙をとじつけ、その上に革を貼る製本術で、本文を膝る際の支持体が表紙に空けた穴を通り、両者が強固に結び合わせられる。のちの時代になると支持体を表紙の上に接着するだけになる。これに対して、くるみ製本術は、「おもて表紙・背・うら表紙」を一枚状のものにして、本文をくるみ、その際、表紙と見返し用紙の間で膝りの支持体を接着する。つまり、膝りの支持体を表紙の表で接着するのがとじつけ製本で、表紙の裏で接着するのがくるみ製本となる。表紙と革の間か、表紙と見返し用紙の間か、という違いである。とじつけ製本の場合は、「とじ見返し」にしてほかの本文の折丁と一緒にとじつける場合が多い。

くるみ製本は簡易なため、ヨーロッパでは版元製本を可能にし、1800年代半ばには製本の主流となっていた。製本術を移入した際、西欧で主流のくるみ製本だけを移入したのではないかという見方もあるが(大貫伸樹『製本探案』2005年)、印書局のお雇い製本教師W・F・パターンソンは、『蘭蘭西法律書』上下巻をとじつけ製本で、『泰西政学』をくるみ製本で仕上げ、2つの製本術を伝授していたことがうかがわれる。

綴じは、本文の背に横から糸を通す「平綴じ」が典型的で、和本の製本も「綴じ」の1種といえる。膝りは折丁の背を縫うことを意味し、面付け印刷が一般化し、たとえば16頁だての折丁が20集まって320頁の本ができる場合、20の折丁の背を縫ってとじつける。その膝り糸を固定する支持体が、少し太めの別の糸であったり、多くの場合は帯麻であったりする。支持体を必要としないで膝る方法もあるが、日本の場合、機械膝りに移行するまでは、支持体をつかった抜きとじ(折丁2丁を1つとして交互に膝る)が主流であったと考える。大貫は支持体(フッセル)がいつのまにかなくなったというが(前掲書)、寒冷紗に隠されており、テープ綴じのような大きな支持体でなくなったのではないかと考える。

明治初期は、折丁であっても平綴じにするという、印刷と製本のちぐはぐがあったが、膝り(本膝り、抜きとじ膝り)はくるみ製本とともに定着する。が、革装であっても、手間のかかるととじつけ製本は、明治の早い時期に消えていくことになる。